

絵巻物を活用した歴史的思考力の育成

—高校「日本史」の授業開発を手がかりとして—

高知県立高知追手前高等学校 教諭 岡 昌子

1 はじめに

現行学習指導要領の「日本史B」では、歴史における資料についての学習や主題を設定して追究する学習などを通して、歴史を学ぶ基本的な方法や歴史的な見方や考え方を身に付けさせるよう構成されている。しかし、現場では限られた授業時間の中で、いかに効率よく教えるかに腐心し、学習指導要領の「資料をよむ」「資料にふれる」に充てる時間は限られている。また、学習指導要領では、生徒の主体的学習活動や歴史的思考力の育成が重視されているが、通常の学習活動においては、これらが重視されているとは言い難い。そこで、これらの課題を克服することのできる授業開発を、研究のテーマとした。

まず、資料の選定にあたっては、近年絵巻物を活用した中世社会史研究が盛んとなっている歴史学の現状から、絵巻物に注目することにした。絵巻物の活用は、現状では教科書の本文の補完として、絵巻物に描かれた絵画の一部を利用するに留まる。絵巻物は日本中世文化を代表する絵画で、美術工芸品として国宝に指定されたものも多い。実物大の絵巻物を活用した授業を行うことは、「資料をよむ」「資料にふれる」を同時に行うことができ、歴史の学び方や歴史的な見方考え方を身に付けさせることができる。また、絵巻物に表現された内容を読み解くことを通して歴史的思考力を培い、その時代を理解することにつながるのではないかと考える。

2 研究の目的

本研究は、「日本史B」の「資料をよむ」「資料にふれる」の項目において、絵巻物の活用を通して、従来の知識注入型の歴史授業から、生徒の主体的活動を取り入れながら歴史的思考力を育成する歴史授業への転換を試みる。そのために授業モデルを開発し、実験授業を通して授業モデルの有効性を検証することを研究の目的とする。

3 研究内容

(1) 歴史的思考力育成における絵巻物の意義

① 歴史学研究における絵巻物

まず、絵巻物の定義と歴史学研究、特に中世史研究において絵巻物がどのような位置づけをされ、またどのような価値を持つのかを明らかにした。

絵巻とは、詞書と絵から構成される巻物で、内容は物語絵など一定のストーリーのあるものを指し、日本の中世を代表する絵画である。また今日残っている絵巻は数百点にのぼるといわれる。しかし過去には多くの絵巻物が作成され、消滅したものも多い。現存する絵巻の多くは国宝や重要文化財に指定されている。絵巻物は中国に端を発するものの日本独自で発展したもので、日本の中世を代表する史料である。絵巻はその登場する院政期から鎌倉時代までが黄金期で、それ以降はその価値も下落した。絵巻が大衆化したための大量生産がその理由の一つである。絵巻物は巻物という形式であるため、他の絵画史料にはない独自の技法を使用しており、これらの特徴が絵巻物たる所以である。絵巻は「手の中の映画」とも言われるように、動かして見ることにこそ意味のあるものである。私たちが普段見ることのできる絵巻は、博物館で陳列したものや、図版として掲載されたもので、それらは動かないものである。動く絵である絵巻の利点を生かした授

業を行えば、絵巻物本来が持つ素晴らしさも味わうことができる。また、今日まで伝えられる絵巻物で、制作当初の完全な形態を保っているものは極めて稀である。絵巻物はその誕生から現在まで、何百年もの間さまざまな流転を繰り返し、そして現代の私たちに伝えられている。つまり絵巻物自体が歴史の生き証人であるといえる。絵巻物は、あるものは宝物として蔵奥深く納められ、またあるものは人の手から手へと渡り歩くなど、様々な人々の思いが絵巻物には残されている。貴重な文化財であるこれら絵巻物を用いた学習は、歴史遺産を後世に伝える精神を育成するためにも意義のあるものである。

近年の中世史研究の中で、注目を集めている分野として、絵巻物をはじめとする絵画史料がある。歴史研究では、従来は文献史料を中心として解明することが多かったが、近年では絵画史料を使って歴史研究を進める研究者も多くなってきた。絵巻物は、特に中世社会史研究において、その利用価値は大きいといえる。絵の中に描かれているさまざまなヒトやモノやコトは、中世の在り方をそのまま見せてくれる。絵を見ることで、中世民衆のスタイルやしぐさ、行為、また物や場を明らかにすることができるのである。近年の歴史学における社会史の流行は、史料としての絵画を注目させるきっかけとなり、特に中世史においては、その時代の代表的な絵画史料である絵巻物に注目が集まり、研究されるようになった。日本史の授業においても、中世史を扱う際には、絵巻物の活用は有効性が高いといえる。また「見る」ことを通して、その時代の社会の様相など歴史的思考力を働かせることのできる教材ではないだろうか。

② 学習指導要領における資料活用の重視

次に、学習指導要領における「歴史と資料」の取り扱いと、高等学校教育課程実施状況調査報告書の結果をもとに、日本史学習における資料活用の重要性を明らかにした。

ア 「日本史B」における「歴史と資料」の取り扱い

現行の日本史Bから、「歴史と資料」の項目が新たに設定された。歴史とは、資料に基づいて叙述されるものである。また様々な発見や発掘により、歴史は修正される。歴史教科書は現時点での研究成果の賜物であるが、それは不変ではなく、新しく書き換えられていくものである。歴史はどのようにつくられていくのか、生徒たちが普段使用している教科書はどのようにつくられていくのか、その基となるのは資料である。「歴史と資料」の項目の設定は、生徒たちが直接歴史の現場に立ち会える機会、つまり生徒一人一人が歴史学者としての疑似体験ができる絶好の機会となる。また、「資料をよむ」「資料にふれる」ことは、受け身となりがちな日本史の授業の中で、生徒たちが作業的・体験的な学習ができるという利点もある。このように「歴史と資料」の設定は、従来の日本史学習が抱えていた知識・理解中心の教え込みになりがちな学習から、生徒自身が学び方を学ぶ、また歴史的思考力を育成することができる学習への転換を打ち出したものと評価できる。

絵巻物を活用する授業は、「資料をよむ」「資料にふれる」の両者を同時に行いながら、また生徒が主体的に資料に関わることができる最良の教材なのではないかと考える。

イ 「観点別評価」

現在、高等学校の生徒指導要録には観点別評価は導入されていない。しかし国立教育政策研究所教育課程研究センターの平成15年度高等学校教育課程実施状況調査報告書でも、各科目の第4節には「評価の観点別にみた調査結果の分析及び指導上の課題」が項目として載せられており、高等学校でも観点別評価へ進んでいることは明白である。ここでは、この報告書があげている課題と指導の改善をもとに、現在の高校日本史が抱える問題に、絵巻物を活用した授業はどのように応えることができるのかを明らかにした。

報告書にあげられた「観点別評価」と「指導の改善に向けて」の課題と、その解決策を示すと、次のようにまとめることができる。

○生徒の歴史に対する興味・関心を呼び起こすような歴史資料の提示

→アニメの原点ともいわれる絵巻物は、生徒にとって興味・関心を引きやすい資料である。

○資料の適切な読み取り

→絵巻物の鑑賞法を学ぶことは、資料の読み取り技法を学ぶこととなり、意義がある。

○教え込むのではなく考えさせる授業

→絵画資料は、生徒自らが思考しやすい資料である。

○思考・判断した結果を表現できる能力の育成

→ワークシートなどを使用して、書かせたり発表させたりする。

○集団で学習する利点を生かす授業

→グループ学習を取り入れ、皆で話し合いを行う。

○歴史を構成する要素を総合する力の育成

→政治・経済・社会・文化を総合的に理解することができる資料を取り上げる。

○作業的・体験的な学習の充実

→絵巻物を読み解くことは、生徒たちにとって体験的な学習と成り得る。また教師誘導型ではなく、生徒たちの主体的な活動を導きやすくすることもできる。

以上のように、調査報告書からも、資料の活用力や歴史的な考察力の育成がいかに必要とされているのかが明らかとされており、絵巻物の活用はこれらの課題解決に有効であるといえよう。

(2) 絵巻物を活用した日本史学習の現状と課題

① 日本史教科書にみる絵巻物

ここでは、主要教科書における絵巻物の使用例を、本文の補完としての扱いと、「歴史と資料」での扱いとを各々分析し、その特徴と問題点を明らかにした。

本文の補完としての絵巻物の使用例は、いずれも歴史用語や戦いの様子を、図版に示すことによって、より理解しやすくするために用いられている。ほとんどの絵には説明が記されており、視覚と説明によって教科書本文の語句を理解するための手助けとなっている。絵巻物の使用例は、少ない教科書で15、多い教科書では23もの絵が使用されている。また同じ絵巻でも『一遍上人絵伝』や『真如堂縁起絵巻』など複数枚使用されているものもあり、教科書掲載の絵画史料の多数を、絵巻が占めることになる。また、これらの絵巻の使用される時代は、絵巻作成時と同時代の平安末期・鎌倉・室町時代が圧倒的である。その中でも特に鎌倉時代が中心となる。室町時代も終わりになると、屏風図が絵巻にとって代わられることとなり、教科書でも『洛中洛外図屏風』『長篠合戦図屏風』『南蛮屏風』などの使用例が多くなっている。絵巻物は歴史用語を視覚的にわかりやすくするために使用されており、ほとんどの絵巻は資料の補完としての位置づけが多く、見てわかる構成となっている。問題点としては、絵巻物の制作年と、資料として扱われる年代のずれが生じていることである。高校の場合、絵巻物は文化の項目で学習するので、どの時代の作品であるかは理解できる。しかし絵巻物には制作年が不明なものも多い。風俗などは、何世紀を経ても変わらないものもあるが、絵巻物を資料として扱う以上、その注意は必要である。『一遍上人絵伝』の「備前国福岡市」や「武士の館」など、画面を詳細に見て説明を加えたものもあるが、全体的な特徴としては、絵巻物を「読み解く」方法としての記載は非常に少ないことが指摘できる。

また、「歴史と資料」について、「資料をよむ」には、木簡や書状などの文字資料を読むものと絵画資料を読むものとに大別される。絵画資料としては、『一遍上人絵伝』が使用されているものが、3社（山川出版社『新日本史』実教出版『日本史B』、東京書籍『日本史B』）あった。いずれも当時の社会風俗、経済の様子や交通・信仰の様子を絵から読み取るものである。「資料を

よむ」は学習指導要領では学習の導入部分に位置づけられており、文字資料と比べて絵画資料の方が取りかかりやすいという点からも多く採用されているのではないかと考える。「資料にふれる」については、記載のない教科書もあった。記載のある教科書では、各教科書とも史跡や博物館を積極的に探訪することを奨励し、また博物館での資料の見方や利用法などを提示するものであった。遠隔地の史跡に行くことは不可能なことも多いので、いずれの教科書も身近な史跡や資料館を訪ねてみよう、との提案をしている。近年、文化財などの歴史遺産への落書きなどが問題となっている。歴史に対する興味・関心のみならず、文化遺産を尊重する態度の育成のためにも「資料にふれる」学習は、大きな意味をもつといえよう。しかし、博物館や歴史資料館などへ見学に行くことは、時間的・地理的制約もあり、ままならないのが現状である。そこで活用したいのが日本史教材のレプリカである。日本史のモノ教材の中には、現物と見間違えばかりのレプリカがある。絵巻物のレプリカもあり、モノ教材に生徒たちは興味を示す。しかしモノをモノとして終わらせず、それを主役として扱うために、絵巻物のカラーコピーは大いに活用できるのではないだろうか。それを手に取ることは、コピーといえども「資料にふれる」と同じ価値を持つものではないかと考える。

② 先行日本史授業に見る絵巻物

ここでは、絵巻物を主体とした先行授業実践を取り上げ、仮説に基づいて分析し、日本史学習における絵巻物活用の課題を明らかにした。

仮説の設定にあたっては、(1)の②のイにあげた調査報告書より提言された7つの課題をまとめ、次の4点を仮説として設定した。

仮説1： 絵巻物を詳細に読み解けば、その時代の特色を把握することができるのではないかな。

仮説2： 絵巻物の特性や鑑賞法を理解すれば、絵巻物に興味関心を持ち、読み取りも容易になるのではないかな。

仮説3： 生徒の参加を促す活動を取り入れれば、学習意欲も高まるのではないかな。

仮説4： 生徒の思考を深めるための発問を行い、その結果を記述し発表させれば、生徒の思考力も深化するのではないかな。

上記の仮説をもとに、絵巻物を主教材とした授業実践を分析した結果、以下の傾向を抽出した。

仮説1・時代性

絵巻物の教材としては、圧倒的に『一遍上人絵伝』『一遍聖絵』ともいう、『蒙古襲来絵詞』を扱ったものが多い。『一遍聖絵』では社会史、『蒙古襲来絵詞』では政治史を読み解くものが主流である。絵物語が多い絵巻物の中で、これらは史実性が高く、また描かれた時代とその内容が近似しており、史料としても信用性に足るものであるからであろう。ただし時代性を総合して読み取るものはほとんどない

仮説2・鑑賞法

絵巻物の見方や異時同図法については触れているものもあるが、詞書などについて言及しているものは非常に少ない。

仮説3・主体的活動

討論授業など、主体的活動が積極的になされているものもあるが、「絵を見て知る、理解する」などの教師誘導型の授業が多数を占める。また主体的活動は導入のみで行われ、後は教師が説明する方法が多く、主体的活動は一部に留まることが多い。

仮説4・思考

「絵を見て知る」ことを主眼とするものが多い。「これは何か」と事実的確認を行うものが多く、「なぜ」「どうして」など思考を深める発問はあまり多くはない。

仮説をもとに、絵巻物を主教材として扱った先行授業実践をみた結果、日本史学習における絵巻物を活用するための課題として、次の点があげられる。

- ・ 史料として信憑性のある絵巻物かどうか。
- ・ 「見てわかる」絵巻物であるかどうか。
- ・ 時代性を理解するためにも、政治・経済・社会・文化などを総合的に捉えることができる絵巻物であるかどうか。
- ・ 生徒たちが参加しやすい、また意見が述べやすい絵巻物であるかどうか
- ・ 「資料をよむ」「資料にふれる」ものとして、新しい活用の仕方を提言することができるかどうか。

以上の課題克服と仮説の検証のため、授業モデルを開発した。

(3) 『一遍上人絵伝』を読み解く歴史授業設計と実践分析

① 『一遍上人絵伝』授業モデル

ここでは絵巻物『一遍上人絵伝』を読み解く授業モデルを提示した。

単元設定の理由

一遍（1239～89）は、時宗の開祖であり、伊予に生まれ兵庫の観音堂に没するまで、その生涯の大半を諸国の遊行に費やし、多くの人々に念仏を勧め、ことに踊念仏によって浄土教の大衆化に尽くした人物である。『一遍上人絵伝』は一遍の没後10年目に、弟子聖戒と絵師円伊によって作成された絵巻物であり、画図は写実性に富み、当時の生活状態をよく伝えたものとして評価も高く、国宝ともなっている。作成時期が明らかな上、当時の社会風俗を如実に描写した作品としても価値の高いものである。歴史教材としての『一遍上人絵伝』は教科書・資料集で断片的に用いられている。文献史料の活用のみでは中世の庶民像を理解することは難しい。しかし生徒自らがこの絵巻物を詳細に見て、それを読み解くことによって、時代の特色をより深く理解することができるのではないかと考える。

単元の指導計画と目標（全3時間）

1 時限：「鎌倉入り」を読み解くことを通して、この時代の政治を理解する。

2 時限：「備前福岡市」を読み解くことを通して、この時代の経済流通を理解する。

3 時限：「空也上人遺跡市屋道場」を読み解くことを通して、この時代の宗教・社会を理解する。

あわせて全時間を通して、絵巻物の鑑賞法や特色・技法を理解する。またワークシートの活用を通して、生徒の歴史的思考を深める。

（実験授業は平成19年10月9日から11日まで、高知県立0高等学校2年生2クラスで行った。）

② 仮説の検証と課題

ワークシートの分析とアンケートの結果と感想をもとに、仮説の検証を行った。

まず、仮説1の時代性の読み取りについて、2時間目の「福岡市」、3時間目の「京都市屋道場（踊念仏）」については時代に迫ることは有効であった。しかし1時間目の「鎌倉入り」から政治を読み取ることは難しかったようである。『一遍上人絵伝』は高僧伝の絵巻であるため、宗教画としての色彩が強い。この授業では史料は一つの絵巻物に限っていたため、他の絵巻物や史料も加えなければ政治背景などを導くことは難しかったかもしれない。史料の選定にあたっては更なる吟味が必要であった。参観された先生方からは、宗教絵巻の特色を生かして鎌倉仏教での扱いに絞った方が焦点化しやすい、とのご意見もいただいた。3枚の絵から、鎌倉時代全体の時代性を捉えるのはやや無理があったといえよう。この授業は、鎌倉時代を学習した後に主題学習として位置づけているが、実験授業では、鎌倉時代を学習してからかなり時間を経た時に飛び込み授業で行ったため、生徒たちにとっては難しく感じられたかもしれない。アンケートでも、「時代性を、

絵からのみで読み取るのは難しかった」との意見が多かった。以上から、限られた絵巻物の史料のみでは、時代性に迫るねらいには限界があるといえる。

仮説2の、絵巻物の鑑賞の技法を学んで絵巻物に興味関心を持たせるという仮説については、85%の生徒が「興味を持った」「やや興味を持った」と答えており、一応の成果は得られた。絵巻物の特色の一つである異時同図法も、はじめは戸惑っていたが2度目はすぐ理解することができていた。また、予め隠していた画面を出させる手法は、絵巻物の特色である「動く絵画」を理解するのに有効であった。また詞書を読むことにより、画面の解釈がより明確になったことから、絵巻物の鑑賞法のスキルの獲得は、画面の読み取りを容易にさせるのに効果をもたらしたのではないだろうか。

仮説3の主体的活動については、1・2時間目は各自で、3時間目は4人グループでの読み解きを行った。授業後のアンケートでも、各自で読み解きを行うよりもグループで行う方がお互いの意見に触発されたとの感想が多く、絵巻物などの絵画史料の読み解きには、主体的活動がより有効であることが証明された。絵画史料は文献史料よりも生徒が参加しやすく、読み解きは個人に任せるよりもグループで行う方がより有効であることがわかった。アンケートでも88%の生徒がグループ活動の方が効果的であると答えていた。しかし、実験授業でのグループ活動は1時間の時間配分であったため、活動が中途半端で終わってしまった感是否めない。時間を十分に取り、疑問点を争点として話し合いをさせた方が、より思考が深まったのではないかという課題も残された。

仮説4の思考について、生徒のアンケートから「絵から想像するのは難しかったが、普段考えないことも考えることができて良かった」「推測するのは楽しかった」との意見も多く、絵巻物を読み解くことを通して、生徒たちの思考を深めることができたのではないかと考えられる。また1時間目には画面の風景のみを読み取っていた生徒も、2時間目には社会の在り方や庶民の力の向上などに言及するようになるなど、思考の深化が見られた。全体的に、1時間目の問いにはすぐ答えられなかったが（ワークシートに白紙の生徒も見られた）、2時間目にはほとんどの生徒が最初から記入するなど、読み取りの能力と思考が着実に身に付いた結果だといえる。生徒のアンケートでも、「はじめは絵の中にいる人がどのようなことをしているのか、絵が何を表しているのかを考えていたが、後に人々の心情や時代背景、またこの絵は何を表現しているのかを読み取れるようになった」という意見もあり、それを証明しているといえる。またどのような時に思考は深まったか、という問いに「ワークシートに記入する時」との意見もあり、書く行為を通して、より深く考えたことも証明されたといえるだろう。

また、授業後の感想には、「今まで資料の読み取りは苦手だったが、今回じっくりと資料を見たので、読み取りの自信が持てた」「色鮮やかな絵巻物を見ることができて良かった」との意見もあった。絵巻物を使って、「資料をよむ」「資料にふれる」ねらいも達成できたといえる。

しかし、この授業では『一遍上人絵伝』を異なる場面から同レベルで読み解きを行うものであったため、生徒の思考の深化を図るためには、授業ごとに問いを深化させていく授業展開を図るべきであった、という課題も残された。

4 まとめ

本論文の研究成果として、次の点があげられる。

- ・ 現行学習指導要領に新しく設けられた項目「資料をよむ」「資料にふれる」を同時に行う授業モデルを提示することができた。
- ・ 絵巻物の読み解きを通して、主体的活動と歴史的思考力を育成する授業モデルを開発することができた。
- ・ 詞書や異時同図法の理解は、絵巻物の読み解きを容易にすることが明らかとなった。

今後の課題としては、次の点があげられる。

- ・時代性を総合的に把握することができる、よりよい史料を選定すべきである。
- ・授業モデルは、異なる画面での同レベルの読み解きを行う授業構成であった。時間ごとに読み解きのレベルを上げ、思考の深化を図る授業構成を行うべきである。

課題を修正すべく、今後とも授業モデルの改善を図り、よりよいものへ再構成したいと考えている。

註) 本文では、歴史学での表記は「絵画史料」、教科書・学習指導要領での表記は「絵画資料」とした。

《 引用・参考文献 》

- ・『朝日百科 日本の歴史・別冊 歴史の読み方』朝日新聞社（1992）
- ・網野善彦『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房（1991）
- ・石上英一編『日本の時代史 30 歴史と素材』（2004）
- ・奥平英雄『絵巻物再見』角川書店（1987）
- ・金井清光『一遍聖絵新考』岩田書院（2005）
- ・黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社（2002）
- ・黒田日出男『絵画史料で歴史を読む』筑摩書房（2004）
- ・国立教育政策研究所教育過程研究センター『平成 15 年度高等学校教育過程実施状況調査報告書—高等学校地理歴史—世界史 A・世界史 B・日本史 A・日本史 B・地理 A・地理 B—』実教出版（2006）
- ・小松茂美編『日本の絵巻 20 一遍上人絵伝』中央公論社（1990）
- ・佐伯真人・澁澤文隆・原田智仁編著『改訂高等学校学習指導要領の展開 地理歴史編』明治図書（2000）
- ・砂川博『一遍聖絵研究』岩田書院（2003）
- ・武田佐知子編『一遍聖絵を読み解く』吉川弘文館（1999）
- ・藤原良章・五味文彦編『絵巻の中世を読む』吉川弘文館（1995）
- ・若杉準治編『絵巻物の鑑賞基礎知識』至文堂（1995）



(図1)「鎌倉入り」(小松茂美編『日本の絵巻 20 一遍上人絵伝』中央公論社 1988)



(図2)「備前福岡市」(同)



(図3)「空也上人遺跡市屋道場」(同)